

羽幌施業指標林の施業の変遷と現状について (針葉樹林施業から針広混交林施業へ)

留萌北部森林管理署 一般職員 清田 凌平

変遷

羽幌施業指標林は、昭和初期に「黒化促進事業」として、天然林をより生産力の高い針葉樹の増殖を図る考えのもとに設定され、漸伐的施業により上層木の広葉樹を伐採し、同時に刈り出し等でトドマツ稚幼樹の育成を行いました。その結果、昭和25年では針葉樹の蓄積割合が40%から昭和51年に80%、平成8年には89%となりました。



その後、価値が見直されてきた広葉樹の発生を促し、高さや種類の違う樹木からなる「水土保持モデル林」に誘導していこうと、平成8年に一部択伐などを行い、以下のように4つの試験区を設定し今に至っています。



昭和51年当時の林相

試験区の現状

【比較対象地】

○無施業区 昭和51年から伐採をしていない箇所
Ha当たり 810本、361m³

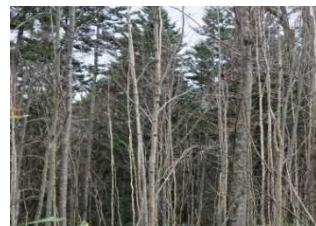
トドマツが蓄積で79%を占め、平均胸高直径21cm、樹高16m。広葉樹は、シナ、イタヤ、ホオノキなど平均胸高直径20cm、樹高14m。昭和51年と比較して43年経過したHa当たりの蓄積は表のとおりです。(単位:m³)

	昭和51年	令和元年
針葉樹	151	284
広葉樹	37	77



○皆伐区 皆伐(30m×50m)し地ガキをした箇所

カンバ主体の林分で、ha当たり4,400本、平均胸高直径4cm、樹高5m。カンバが高密度に成林しており、密度管理をして肥大成長を促す必要があります。なお、現在、ササが回復しており、稚幼樹は見られません。



○択伐区 20～30%の択伐をした箇所
Ha当たり 700本、375m³

トドマツが蓄積で80%を占め、平均胸高直径24cm、樹高17m。広葉樹はホオノキ、イタヤ、カンバなどで平均胸高直径22cm、樹高16m。林相は無施業区と比較して大きく変わりません。



○帯状区 列状に4m伐採し地ガキをした箇所

地ガキ幅には、ホオノキなどの広葉樹が発生しha当たり1,750本、平均胸高直径4cm、樹高6m。4mの剥ぎ幅のため、上木の被圧などで、当初5万7千本あった稚幼樹はほとんど消失し、皆伐区に比べ本数が少ない状況です。ササが回復して稚幼樹は見られません。



今後の展開

天然力を活用した森林づくりのもと

区分	前生稚幼樹が多く発生している箇所	前生稚幼樹があまり発生していない箇所
伐採の方法	単木伐採	群状または10m程度の帯状伐採
更新・保育	必要に応じ刈出し	5m程度の幅を持った地ガキ

広葉樹主体の針広混交林に誘導していきます。
また、両区分の稚幼樹の発生状況を比較する試験区を設定し、今後も森林現況の変化を調査していきます。

○現状 N:L = 8:2



○将来イメージ(3回目択伐:60年後)
N:L = 4:6

